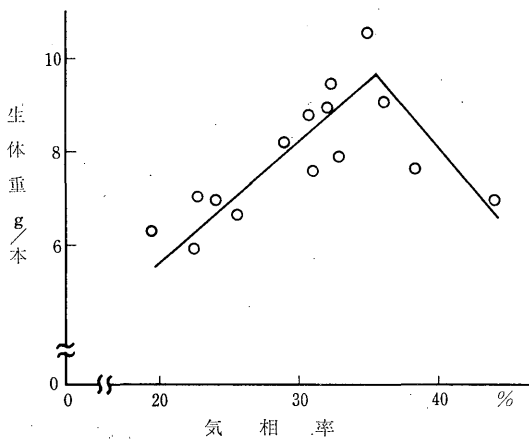


気相率とトマト苗の生育



ここで気相率をとりあげたが、これはとりもなおさず通気性の良否をあらわす一つの指標と考えられるからである。すなわち空気(チッソ、酸素それに炭酸ガスとする)はそれぞれのガス、例えば酸素の濃度の高いところから低い方へ移動する性質があるが(拡散)、それが土壤中では土粒子や水分によって邪魔される。

その割合は、気相率が少ないほど大きくなることは当然である。実際に測定した経験によると、35%の気相率では大気中の動きの $\frac{1}{5}$ に、20%では $\frac{1}{20}$ にまで減少する。つまり図とガスの移動測定からみて、培地中のガス

が大気と更新され、根に十分な酸素を供給するためには30~35%の気相率が必要となるわけである。

このように苗の生育と最も相関の高いのは、気相率とみてよいようである。ただしこれには肥料が十分与えられ、pH や水分管理が適切であることが前提である。

有機質資材の使い方

以上のように、有機質資材を配合した培地はおおむね育苗用として使えるが、資材によっては分解し易い成分を多く含むものがあり、このような資材では、土壌微生物が施肥チッソを消費するため、植物がチッソ飢餓(チッソ不足)になり易い。

ピートモスやクンタンには易分解性有機物があまり含まれていないので、その恐れは少ない。しかしバークやオガ屑を用いるときは注意が必要である。

バークでも広葉樹と針葉樹では前者が、バークとオガ屑では後者がチッソ飢餓を起こす割合が強い。バークが堆肥化されて市販されているなかにも、チッソ飢餓を起こした例がある。この防止策としては炭素率(炭素のチッソの比)を30前後まで下げることが必要である。

そのためには、家畜の糞尿や肥料を加え堆積しておくことが望ましい。もしそのまま用いるとすれば、土に対し約20%(容積比)が限界である。なおバークには生育阻害物質が含まれているので、注意が必要である。

ことしもミカンは薬剤摘果

農林省は去る8月21日、50年度第1回のミカンの予想収穫量を発表した。

これによると、8月1日現在の実のつき方などをもとにして、今後の気象条件や栽培管理を例年なみと見込んだ場合の収穫量は約383万8千トン。去年の収穫量より45万トンも多く、豊作貧乏が懸念されるため、ことしも昨年同様、大がかりな摘果運動が必至になってきた。

ミカンの生産はここ10年間余で約4倍にもなった。特に表年の47年には、前年より一挙に100万トンも増えたため、過剰となって暴落。また48年は裏年に当たったため前年より20万トン近く減ったが安値傾向で、生産者は2年続きの豊作貧乏に泣かされた。

49年は当初47年を上回る史上最高の生産が予想され同年8月1日現在の予想収穫量は386万7千トン。このままでは大暴落による混乱が避けられないので、農林省では7億円の補助金を投じて大がかりな摘果指導

に乗り出したことは記憶に新しい。その結果、49年の生産は338万3千トンに落ち着いて、市況は生産者が期待した線を超えるに至った。

50年度については農林省は、摘果のほか、新植の抑制、他作目への転換奨励などで、これ以上ミカンの増産を抑える方向をはっきりと打ち出していた。

ところが、裏年に当るにも拘らず、今年の第1回の予想収穫量が昨年同期に比べて1%しか減っていないのは、ウラ・オモテの少ない若い木が多くなっていること、着果数が多めで、肥大も順調なことによるものと見られている。

農林省関係当局では、同月末までに生産者団体などで「果実生産出荷安定協議会」を発足させ、需給見通しや消費動向を検討するが、昨年同様、大規模な摘果調整を行わざるを得まいとみている。

一方、日園連では既に、生産目標を昨年同様の340万トンと打ち出し、各産地で不良果を落す自主的な摘果運動を始めている。